

「パブリックスピーチを導入した授業実践」

——聞く力を高める工夫——

雲 山 由美子

1 はじめに

「皆で集まって元気をもらおう」と、最初は「源氏物語を読む会」から始まった県内の四人の仲間が月一回集まってお互いの実践を持ち寄るところから「阿星会」という研究会を発足させたのが平成七年の夏である。少しずつ人数が増え、昨年から「淡海」とのは研究会」と改名し、四校で同一の実践に取り組んできた。「個人の実践」ではなく同じ意識を持った者が集まって、同じ視点から実践を行うことにより、刺激を受け、授業に深まりができたように感じる。

平成十年七月二十九日に、文部省から発表された教育課程審議会の「審議のまとめ」の国語の改善の基本方針は「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった従来の指導の在り方を改め、自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する」となっている。確かに現状としては、多くの生徒が「情報を自分なりに分析する」段階で留まり、「自分の考えを他者に分かりやすく伝える」というこ

とについては依然として抵抗があるように見受けられる。また、「伝える」ことを目標とした学習活動に意欲的に取り組める生徒においても、ややもすると自分の思いを淡々と一方的に語るだけで満足し、聞き手の立場や反応に思いをいたすことのない表現活動になりがちである。聞き手の立場を無視した相互理解などありえないであろう。いずれ社会に旅立っていく生徒たちには、その中でよりよく生きるためにも、自分の考えを他者に堂々と、分かりやすく、そして聞き手の反応や要求に応じた音声表現ができる能力を身に付けさせたい。「明確に自己を表現する力」と「聞き手の立場を察知する力」こそ二一世紀を担う彼らの真の生きる力に繋がるのではないだろうか。

「パブリックスピーチ」という用語は英語である。このことからわかるように、スピーチの研究については欧米諸国には長い伝統がある。日本では欧米の議論を重視するスピーチの概念を普及させようという動きが明治時代に起こった。その代表が福沢諭吉である。しかし、その動きも政府の言論弾圧により下火になった。スピーチの重要性が指摘されるようになったのは日本社会が急速に国際化していった最近である。学校教育でこの動きをいち

早く取り入れたのは英語教育であろう。従来の読解中心からコミュニケーションのための英語教育への転換を図ろうと努めている。

一方、日本の国語教育においては、西尾実氏が「言語生活の探求」(昭和36年)のなかで、「主体が相手と一体になって話し聞くこと」の重要性を指摘している。

すでに昭和三十年代にこのような論が展開されていたにも拘わらず、その後、話し言葉指導はあまり重要視されなかった。その背景には日本人特有の、文字言語尊重・音声言語軽視の考え方が底流にあったことは否めない。しかし、急速な国際化の影響により音声言語の教育に対する重要性が叫ばれるようになった。

本研究会では、音声言語、中でも「パブリックスピーチ」に焦点を絞り、生徒が様々な場面において、他者の立場を慮りながら、生き生きと自分の考えを表現できる能力を養成することを目標に実践を行うことにした。この研究では、「パブリックスピーチとは一人の話者が小グループの聴き手、または多くの聴衆に対して話者の情報や思想・主張を伝えることである」と定義する。

2 各級生徒の実態

(甲西) 平成9年度の卒業生の進路状況は、大学進学32%、短大26%、専門学校26%、就職10%、その他(浪人を含む)6%。

* 授業実施クラス 国語II 3単位(2年) 3クラス、国語表現1単位(3年分割) 3クラス

(湖南農業) 平成9年度の卒業生の進路状況は、大学進学4%、

短大6%、専門学校20%、農業大学校2%、就職64%、自営・家事4%。学科構成は今年度、専門学科4クラス。

* 授業実施クラス 国語I 3単位(2年) 4クラス、国語表現3単位(3年) (うち1単位分割) 4クラス

(守山) 平成9年度の卒業生の進路状況は、大学進学53%、短大15%、専門学校5%、就職1%、その他(浪人を含む)26%。

* 授業実施クラス 現代文 3単位(3年) 3クラス 古典II 3単位(3年) 1クラス

(玉川) 平成9年度の卒業生の進路状況は大学進学52%、短大25%、専門学校10%、就職2%、その他(浪人を含む)11%

* 授業実施クラス 国語II 3単位(2年) 2クラス

3 事前アンケート分析

各校で統一のアンケートを実施し実態を把握することにした。(資料①)

事前アンケートから言えることは次の3点である。

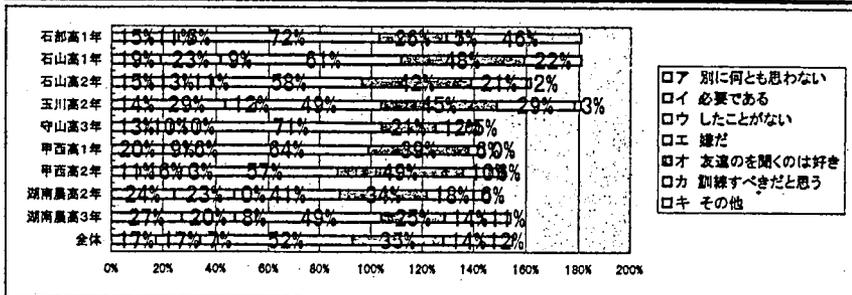
① 小学校、中学校、高校の中でスピーチを一番取り入れていないのは高校である。

② 国語の授業の中でスピーチを取り入れることについては多くの生徒が「自分がするのは嫌だが、友達のを聞くのは好きだ。」と思っている。

③ アンケートを実施した中では、「スピーチが嫌だ」と答えた生徒の割合は、積極的にスピーチを授業に取り入れている湖南農

2. 国語の授業でスピーチをすることについてどう思いますか。

	全体	湖南農高3年	湖南農高2年	甲西高2年	甲西高1年	守山高3年	玉川高2年	石山高2年	石山高1年	石部高1年
ア 別に何とも思わない	17%	27%	24%	11%	20%	13%	14%	15%	19%	15%
イ 必要である	17%	20%	23%	16%	9%	10%	29%	13%	23%	11%
ウ したことがない	7%	8%	0%	3%	6%	10%	12%	11%	9%	5%
エ 嫌だ	52%	49%	41%	57%	64%	71%	49%	58%	61%	72%
オ 友達のを聞くのは好き	35%	25%	34%	49%	39%	21%	45%	42%	48%	26%
カ 訓練すべきだと思う	14%	14%	18%	10%	6%	12%	29%	21%	22%	5%
キ その他	12%	11%	6%	6%	0%	5%	3%	2%		46%



- ア 別に何とも思わない
 イ 必要である
 ウ したことがない
 エ 嫌だ
 オ 友達のを聞くのは好き
 カ 訓練すべきだと思う
 キ その他

4 研究の実際 I

業の2年生が最も少ない。このことから、最初は嫌でもスピーチを積極的に国語の授業の中に取り入れることにより、生徒のスピーチに対する抵抗が小さくなると想像される。

《甲西高校の取り組み 第一段階》

- ① 1年の3学期に、新聞スクラップの読者欄をもとに意見を書き、スピーチをする。
- ② 昨年度の国語の授業で印象に残ったものを1人ずつ発表する。
- ③ 引き続き、新聞スクラップをする。社説・論壇を中心に、テーマごとに集める。
- ④ おすすめの本の紹介文を400字程度で書く
- ⑤ 図書室で実際におすすめの本を持ちながら、前に立って本の紹介をする。(録音)
- ⑥ HR担任や学校司書にも授業に入ってもらい、それぞれ本の紹介をしてもらう。
- ⑦ スピーチ評価表にそれぞれ記入し、「一番読みたくなった本はどれであったか」も書かせる。
- ⑧ 教師による講評と本の紹介

5 中間まとめ

夏休みまでの実践を第四回研究会で協議した。第一段階では、従来敬遠しがちであったパブリックスピーチを各校の実態に合わせ、「とにかく」実践することに重点を置いた。

第二段階では英語教育の実践から学び、聞き手の立場や反応に思いをいたす表現活動をさせる必要性があると気づいた。平成十七年七月二十九日の教育課程審議会答申の「話すこと・聞くこと」の領域においては、「相手の立場や考えを尊重して話し合ったりする態度や能力の育成を重視する」と指摘されていた。「相手の立場や考えを尊重して話し合ったりする態度や能力の育成」とはいわゆるコミュニケーション能力の育成であろう。コミュニケーション能力は、相手の思いや気持ちを聞いて理解する能力のことであり、また、自らの思いや気持ちを相手に伝え、自他の一致点や相違点などについての理解を深め、新たな思いや考えを生み出すとともに、よりよい人間関係を創造していく能力のことでもある。

第二段階の実践として、パブリックスピーチを通じて健全な自己表現の方法と楽しさを学ばせ、よりよい人間関係を作り出していく実践をめざすことにした。

6 研究の実際Ⅱ 中間まとめをふまえ、更に実践を深めた。

〔中西高校の取り組み 第二段階〕
ア、2学年の取り組み

〔二分間スピーチについて〕

今回、スピーチを行った学年は1年次の3学期に新聞スクラップを使った意見文スピーチを経験している生徒が約半数いて「恥ずかしかったが印象に残っている。友人の意見を聞くのは面白い。」と答えている。1学期は「おすすめの本紹介」などで一通り皆の前で話をする練習をし、2学期に毎週1回、特定の曜日に2名ずつ授業の冒頭にスピーチを行うことにした。1学期から授業の冒頭は「十分間読書」にあててきたので生徒の反応はどうだろうと案じていたが実際に始めてみると週1回ということもあって思いの外、皆にとつては楽しみの時間になったようである。

*目標

①意見文を書き、人前で発表する力を身に付ける。

②よい聞き手を目指し、話し手を応援する聞き方を身に付ける。

*授業の流れ

①2学期より、週に1時間、2人が授業の始めに二分間スピーチを行う。

②聞いている者は評価表（メッセージ表）に記入する。

③教師のコメントと共に友人のメッセージ表を綴じて本人に返す。

（本人は自己評価表を記入する）

授業を終えて、スピーチの回を増すごとに発表者を支援しようとする雰囲気クラスに生まれ、生徒達の聞く姿勢が良くなっていくことに気づいた。普段の会話では聞くことのできないクラスメートの一面をうかがい知ることの喜びが感じられた。また、「文化祭に望むこと」「修学旅行に向けて」の発表後クラスの団

結力が深まっていくのを感じ、HR担任からも「このごろ授業のムードが良くなった。」とうれしい言葉をいただいた。聞くことの大切さだけでなく、友人からのメッセージを心から喜ぶ生徒達に言葉を通しての心のふれあひを感じた。

〈高瀬舟デイベートについて〉

2学期に入って本校の第2学年では養老孟司の「脳が死を予測する」を扱い、脳死の問題について考える時間を取った。続いて森鷗外の「高瀬舟」に入り、現代社会にも多くの問題を投げかけている安楽死問題について生徒達の討論の場を設けたいと考えた。いつもなら始めに、読解の作業をしてから話し合いに入るのだが、今回は教師の説明は極力ひかえて、一読後の感想の話し読みのあとデイベートを行うことにした。

*目標

- ①自分達の主張をわかりやすく説得力のある話し方で発表する。
 - ②友人の意見に触れることで自分の考えを深める。
 - ③文学作品の中に込められている問題点を自分達で追求する。
- *授業の進め方

①喜助の行った行為は許されるか否かというテーマのもとで、意見を書き、話し読みをする。

②教師がその意見に目を通し、「喜助の行為に肯定的な意見」「喜助の行為に否定的な意見」に分類する。

③その区分をもとに、5人1班でグループを作り、肯定派、否定派に分ける。

④できるだけ多人数の生徒をデイベートに参加させるため、肯定

派2班、否定派2班(計20名)、司会・計時各1名、残りの18名を審判役とした。

- ⑤開会宣言、立論(各2分) 作戦タイム(3分) 質疑応答(16分) 作戦タイム(3分) 最終弁論(各2分) 用紙への記入(3分) 審判団判定(2分) 講評・まとめ(5分)

⑥事後アンケートをとる。喜助の行為についての意見文を書かせる。

*成果と課題

日頃、文学作品を読むことにすら、受動的になっていた生徒達がデイベートを取り入れ、班ごとに活動しなければならぬ状況の中で非常に積極的に話し合いをし、何度も本文を読み返している姿を見てまず驚いた。本番のデイベートの前に模擬デイベートの時間を設けたが、事前の準備や作戦会議を生徒達は主体的に行っていた。デイベート当日は液晶ビデオカメラを用意し、撮影したが、生徒達は自分がカメラに収まるのがうれしいらしく、最終弁論では、自説を力説しておもむろに眼鏡をはずしてカメラに向かつて歩くという動作をする生徒も現れ、おおいに盛り上がった授業になった。また審判団は、審査用紙を提出させたので、聞く訓練と書く訓練が同時にできたように思う。

生徒達は「結構みな活発に意見がとびかって面白かった」「もつと、とことん討議がしたい」「弁護士になったような気分になれ、何かに向かっていく力が付いたような気がした」「作品の場面が深く読める」「聞いていてこんな意見があるのかと感心した」という感想を述べており、授業としては楽しく、デイベートを是非またやりたいと答えている生徒が多数を占めた。

また、ディベート後、一斉授業で読解を行ったが、生徒達の言葉拾いながら細かい読解を補うことができたので、随分スムーズに授業が進んだ。今回のディベートでは、調べることや、話し合うことの楽しさを実感しながら、良い話し手・良い聞き手になる訓練ができたのではないかと思う。

イ、3学年の取り組み

《先生へのインタビュ》

3年生の国語表現では2学期に面接の練習をし、続いて「先生へのインタビュ」を行うことにした。どちらも教師一人で行うのではなく、チームティーチングの形式で複数の教師が授業に入ることにした。先生方にはあらかじめ生徒達がインタビュに行くことを伝え、協力を依頼した。生徒達にとっては初めての試みなので、事前に他教科の先生に授業に入ってもらい、相手の人間性に迫るにはどのように質問していけばよいのか、実際にインタビュを行ったり、生徒同士で交互に練習をさせることにした。

*目標

- ①話し手の内容を的確に聞き取り、誠実に相手の話を聞く態度を身につける。
- ②興行きのある質問ができるようにする。
- ③インタビュによって得た事柄をできるだけ正確に皆に伝える力を身につける。

*授業の進め方

- ①2人グループを作り、分担を決める。生徒Aは質問者、生徒Bは相手が話したことについての質問をする。

②グループで話材例から3つと是非聞きたいこと1つを相談して決める。

③国語表現の授業に、養護教諭や家庭科の教諭を招き、教師が実際に教室の前に椅子を用意してインタビュの実例を示す。

④生徒2人でお互いのインタビュを行う。

⑤実際に取材に行き、2週間後の授業までに取材の結果と感想をメモにまとめる。

⑥取材の結果と感想の発表をグループごとにする。(資料②)

⑦インタビュによって得た情報をまとめ、生徒同士の他者紹介の記事をつくる。

*成果と課題

「聞く・話す力」を育てる学習活動の1つが「聞き書き」である。「聞き書き」とはある事柄について人から話を聞き、メモを取り、文章にまとめることである。「聞き書き」の過程には人との出会いがある。自分と異なった人生経験してきた人、年齢の違う大人との出会い、それらはこれからの自分の人生を考えていく際に役立つのではないだろうか。

今回のインタビュ相手は生徒達になじみの深い先生方だったので、非常に快くインタビュに応じていただいた。「自分の高校時代」「なぜ教師になったのか」「高校生に望むこと」「初恋」「最近興味を持っていること」など、先生方の人間性にふれる良い機会になったと生徒達は感じているようだった。また、クラスメートへのインタビュも行い、生徒達は、相手の立場に立つことを経験したことで、周りの人の気持ちを汲むことの大切さを知っ

たのではないだろうか。「相手に対する親しみを込めて話しかける」「単に聞き手に徹するだけでなく、相手が話しやすい雰囲気を作り、相手の話を引き出す」など、インタビュアーに望まれる要素は多いが、相手が教師であったため、比較的容易に話を聞き出すことができたようである。発表の場面では対談形式をとり、お互いに当の先生になりきって質問に答えていくなど工夫が見られた。今後は更に発展して、学校外の人へのインタビューを経験させていきたい。また、発表についても単に報告するのではなく、いかにその人の人間性に迫る発表ができるか、工夫が必要と思われる。

7 事後アンケート分析

各校で統一の事後アンケートを実施した。(資料③)スピーチについての事前と事後のアンケート結果を次に列記する。
 ・質問 国語の授業でスピーチをすることについてどう思いますか。
 ☆嫌だ

	【事前】	【事後】
全体	52%	39%
甲西高2年	57%	44%
湖南農高3年	49%	40%
湖南農高2年	41%	41%
守山高3年	71%	56%

玉川高2年 49%
 ☆友達のを聞くのが好きだ 14%

	【事前】	【事後】
全体	35%	59%
甲西高2年	49%	65%
湖南農高3年	25%	43%
湖南農高2年	34%	41%
守山高3年	21%	61%
玉川高2年	45%	87%

☆訓練すべきだと思う

	【事前】	【事後】
全体	14%	17%
甲西高2年	10%	13%
湖南農高3年	14%	15%
湖南農高2年	18%	12%
守山高3年	12%	8%
玉川高2年	29%	35%

*考察

「友達のを聞くのが好きだ」という項目は全体として事前の35%から事後が59%とかなり伸びている。特に守山高3年、玉川高3年での伸びが著しい。両校は進学校であり、生徒達はスピーチの実施については、受験の妨げになるとらえがちであるが、元来高い自己表現力を持っており、スピーチを実施することによって、「友達のを聞くのが好き」と実感したようである。生徒個人の個

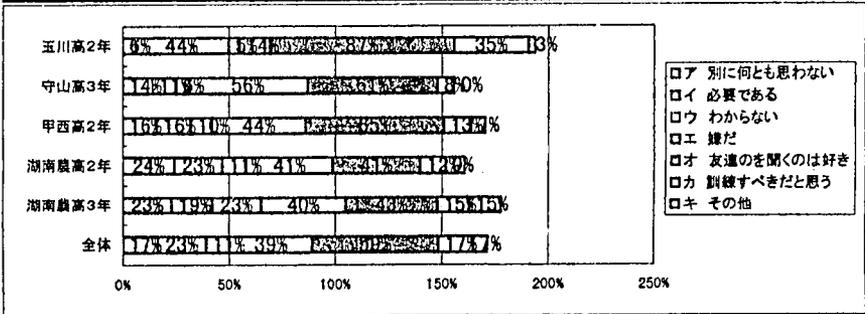
スピーチに関するアンケート調査 事後調査

資料③

	全体	湖南農高3年	湖南農高2年	甲西高2年	守山高3年	玉川高2年
対象生徒人数	472	115	121	121	36	79

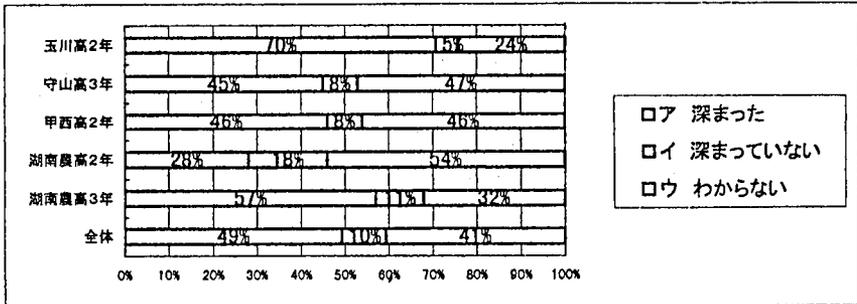
1. 国語の授業でスピーチをすることについてどう思いますか。

	全体	湖南農高3年	湖南農高2年	甲西高2年	守山高3年	玉川高2年
ア 別に何とも思わない	17%	23%	24%	16%	14%	6%
イ 必要である	23%	19%	23%	16%	11%	44%
ウ わからない	11%	23%	11%	10%	6%	5%
エ 嫌だ	39%	40%	41%	44%	56%	14%
オ 友達のを聞くのは好き	59%	43%	41%	65%	61%	87%
カ 訓練すべきだと思う	17%	15%	12%	13%	8%	35%
キ その他	7%	15%	9%	7%	0%	3%



2. スピーチをしたことによって友達に対する理解が深まりましたか。

	全体	湖南農高3年	湖南農高2年	甲西高2年	守山高3年	玉川高2年
ア 深まった	49%	57%	28%	46%	45%	70%
イ 深まっていない	10%	11%	18%	8%	8%	5%
ウ わからない	41%	32%	54%	46%	47%	24%



性がでるような題材を効果的に与えたからであるとも考えられる。

「嫌だ」の項目も事前の52%から事後が39%と減っており、抵抗感も少しは薄れたようである。2の「スピーチをしたことによって友達に対する理解が深まった」全体で49%と半数の生徒が深まったととらえていることも分かった。「深まっていない」は10%であるので、スピーチの実施が人間関係の相互理解の上でも極めて有益であることが分かる。2で「分からない」と答えた生徒達も前向きにスピーチを受け止めている例が多かった。それは、アンケートの3の「スピーチを実施してきて思うこと」の中に生徒の感想として如実に現れている。「嘘か本当か、立て前か本音か、普段からボケっつとしていような輩(H)が、あんなことを考えてるとは思わなかった。あいつは頑張らないだけで、結構何でも出来そうな、マルチな奴だと思う。『自ら伸ばそうと考えず、自分が楽しいと思つたことしかない甘つたれ。』という点では、僕も親近感が湧いたりなんかして、最近よく喋るようになった。僕は普段から『生きる』とか『死ぬ』とかしか考えていないナンセンスな人間なので、Hのような気さくな奴がいると、自分が馬鹿らしく思えてくるのでした。」「僕はスピーチをする事はいいと思う。スピーチをする事によって、その人の物の見方が変わってくるのでおもしろいと思うし、今後、人前でスピーチをする事になるかもしれないので、早い方からやっていると、きちんとしたスピーチができる。僕は人前で話す事などがいやだったけど、勇気を持って話すと、いろいろな角度からの視点があつまるので楽しかったと思う。スピーチも、本当の自分が見えてくるのでいい

と思いました。」

8 評価について

最初はスピーチに真剣に取り組ませるために評価表を準備した。これは、教師に生徒の活動を評価しなければならぬという思い込みがあつたためとも言える。しかし、実践を続けていく中で、評価がなくても生徒は真剣にスピーチに取り組むことが分かってきた。また、授業者もパブリックスピーチの実践においては、「話すこと」の指導よりむしろ「聞くこと」の重要性が分かってきた。話すことの実践においては、聞くことに集中させることが基本である。結論的には評価より、聞き手が話をした人にメッセージを返す方法が、話す側にとっても聞く側にとっても最も効果的な方法であるということが分かった。

9 おわりに

第一段階では、パブリックスピーチを各校の実態に合わせて「とにかく」実践することに重点を置いた。生徒の実態に応じて、どのような授業が展開できるのか、様々な取り組みを報告しながら、研鑽を深めた。中間まとめで、次は聞き手の立場や反応に思いを致す表現活動をさせる必要があるということが分かった。

第二段階では、ディベートやインタビュアーなど変化に富んだ活動を導入することによって健全な自己表現の方法と楽しさを学ば

せ、よりよい人間関係を作り出していく実践を目指した。この二つの段階を経て、本研究では「パブリックスピーチを実践することによって、聞く人の気持ちを思いやり、より人間関係が深まる。」ことを実証することができた。

しかも、「話す」ことよりも「聞く」ことの中から生徒自身が成長していくということが分かってきた。最初話すことにポイント置いて実践してきたが、「聞くこと」を大事にすることに「話すこと」はより充実していくのであると分かってきた。つまり、「聞くこと」にポイントを置くことで、よりよい人間関係を築いていく話ができるようになるということである。

更に、登校拒否、学級の荒廃などの今日的な教育課題の改善のためにも、パブリックスピーチは有効な手段となりうるということがわかった。相手に対する思いやりの言葉がより良い人間関係を築いていく上で欠かせないからである。事後アンケートの分析からも、今回の研究を通して実践した授業は極めて人間関係を深めるために有効であったとの結論に達した。

また、「受験の力をつけるために役に立つのか」との問いには、「高瀬舟」のデイベート例で答えられるだろう。以前からやっていた講義中心の授業より、デイベートを実施することにより読みが一層深まった。あるいは、「受験前に他のクラスは授業してんの何さすねん」と思ってたけど、いい気分転換になったし、勉強にもなった」との生徒の感想もあった。「いつもいっしょにアホなこというてるやつが、深いこと言うたりしてびっくりした」など級友を見直す感想から、様々な場面のパブリックスピーチの機

会を積み上げていく中で、生徒の変容が手に取るように感じられた。

また、私たち研究会のメンバー自身も大村はま先生の言葉「優秀の彼方で生徒を見る」ではないが、評価を越えたところで生徒の本当の姿を数多く目にすることができた。また、一人の実践では限りがあることは、つねづね研究会のメンバーとの研鑽の中で体験していることではあるが、授業も一人の力ではなくて、他者の力を借りる（例、T・T、他教科の先生、AL T、教頭、地域の図書館等）ことにより、厚みのある授業展開ができるのだという手応えも感じた。

他者の力を借りることのできた実践の全ての基礎は人間関係であった。人間関係を築くのは言葉であり、如何に言葉を有効に使うか教師自身が問われる問題でもあった。

今後の課題として、教師自身が普段からよりよい人間関係を築くための言語活動をしているかが重要になってくる。この実践を通して教師自身がよりよい「話し手」「聞き手」であることの必要性を痛感した。

「伝え合う力」の育成をめざして今後も自己研鑽に努めていきたい。

また、「淡海ことのは研究会」としては、ただ、実践を持ち寄るのでなく、今、どんな力をつけようとしているのか、結果としてどうだったのかを見きわめていける眼や考察できる力を養っていきたいと願っている。

（滋賀県立甲西高等学校）